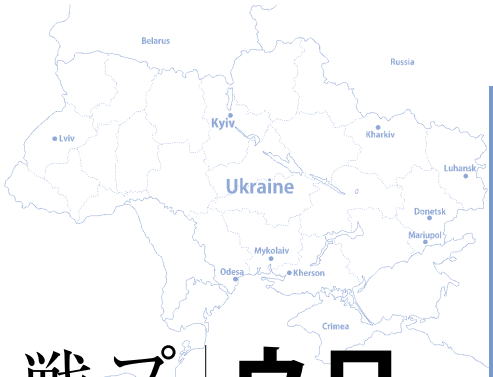

ロシアによるウクライナ軍事侵攻

プーチンは何を求めて戦っているのか？

法政大学法学部
国際政治学科教授
溝口修平（みぞぐち しゅうへい）

２０２２年２月24日にロシアがウクライナに軍事侵攻したことは世界中を驚かせた。また、ロシアによる軍事侵攻は、多くの疑問を起こさせるものでもあった。なぜ軍事的に圧倒的に有利なはずのロシア軍が苦戦をしているのか、なぜ親ロシア派支配地域であるウクライナ東部だけでなく、首都キーウを含むウクライナ全土に攻撃を行ったのか、キーウから撤退し、南東部に軍を集中させている狙いは何か。このように、ロシアの軍事侵攻を巡っては理解に苦しむことが立て続けに起こっているが、その中でも最大の疑問は、そもそもなぜロシアはウクライナに軍事侵攻をしたのかというものである。

軍事侵攻の非合理性

ここで「理解に苦しむ」というのは、ロシアの軍事侵攻が単に非人道的だということを意味しているわけではない。もちろん続々と明らかになるロシア軍の非人道的行為が非難され、責任が追及されるべきなのは当然である。しかし、ここで問題としたいのは、ロシア軍がウクライナに仕掛けた全面攻撃は、ロシアが要求した安全保障上の利益を得るうえで効果的でない、つまり、ロシアの行動が利益の最大化という意味での合理性に基づいていないということである。

ロシアは開戦前から様々な要求をしてきたが、それらは(1)米国とＮＡＴＯに対する要求と(2)ウクライナに対する要求に大別できる。(1)については、ＮＡＴＯの東方拡大停止がその主要な要求であり、プーチンは、ウクライナがＮＡＴＯに加盟するのは「時間の問題」だと述べ、ロシアに対する脅威が高まっていることを強調した。

しかし、実際にはウクライナが短期間のうちにＮＡＴＯに加盟する見込みは高くはなかった。ウクライナ東部で紛争が続いている限り、ＮＡＴＯがウクライナの加盟を

認める可能性は低く、その意味でロシアにはこの紛争を長期化させる誘因があった。反対に、「ウクライナのＮＡＴＯ加盟を阻止」するという名目で、ロシアがウクライナに対し軍事的な圧力をかければ、２０１４年のクリミア併合以降に起きたように、ＮＡＴＯ部隊がさらに増強されることは容易に想像できる事態であった。

(2)についてプーチンは、ウクライナが東部紛争の休戦協定であるミンスク合意を履行していないことを非難し、その地域で起きている「ジェノサイド(集団虐殺)を止めること」を求めた。しかし、ミンスク合意の機能不全は、ロシアが支援する「人民共和国」をコントロールしつつ、ウクライナを不安定化させるというロシアの目的からすれば、それほど悪い状況ではなかった。また、先に述べたように、紛争の長期化がウクライナのＮＡＴＯ加盟を困難にした面もある。そもそも、ウクライナ東部でジェノサイドが起きているという事実もなかった。従って、ロシアが唱える「ロシア系住民の保護」という理由は、軍事侵攻をするためのこじつけと言わざるを得ない。しかも、ウクライナ東部への支配権を確立するのであれば、クリミア併合時と同様に、住民投票を実施して現地住民がロシアへの編入を望んでいるという既成事実を作り、それを受け入れるという方法も可能であり、キーウも含めたウクライナ全土への侵攻は必要なかった。

このように、ロシアが要求する安全保障上の目的を実現するうえで、軍事侵攻というオプションは有効でないだけでなく、ロシアにとって不利益となる行動だったと言える。その意味で、ロシアによる軍事侵攻は非合理的なものであった。

ウクライナへの「なわばり」意識

それでは、なぜこのような非合理的な決定がなされたのか。現在、メディアでは、政策決定における情報の偏りや、プーチン自身の健康不安などがプーチンの判断を迷わせたなどということが指摘されている。実際の政策決定がどのような形で行われたのかは、現時点ではよく分からない。しかし、この戦争は「プーチンの戦争」と言われるように、プーチン個人の考えが強く反映しているのは間違いない。

プーチン個人のウクライナに対する考えが垣間見えるのが、彼が２０２１年７月にロシア大統領府のウェブサイトに発表した「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」という論文である。そこでは、現在のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人はロシア帝国時代には同じ「ロシア民族」であり、「ウクライナ人」という民族はソ連時代に作られたものにすぎないという解釈が示されている。この解釈自体は、ロシアではそれほど珍しい見解ではないが、プーチンはウクライナの主権はロシアとの協力関係によってのみ実現できると結論づけ、ウクライナをロシアの影響下に置くことを示唆している。そこには、ウクライナはロシアの「なわばり」だという意識が強く表れている。

このような「なわばり」を守ることが軍事侵攻の真の目的だと考えると、ウクライナを全面攻撃してゼレンスキー政権を打倒しようとしたことの説明もつく。上述したように、「ウクライナ東部のロシア系住民の保護」のためには首都キーウに侵攻する必要はなかった。それに対し、「ロシア、ウクライナ、ベラルーシの一体性の回復」のためには、ロシアから離れて欧米諸国に接近しようとするゼレンスキー政権は排除されなければならない対象となる。ウクライナを自分たちの「なわばり」にとどめたいというプーチンの強い意識が、この戦争を引き起こしていると言えるのではないだろうか。

そうだとすると、この戦争は長期化する可能性が高い。今回のロシアの軍事作戦は誤算続きであるが、そのような時に合理的な計算よりも「なわばり」意識が優先されるのであれば、プーチンはあらゆる手段を使って戦況を打開しようとする危険性があるからだ。このような相手に対する戦争を早期に収束させることは容易ではない。そのためには、国際社会のより強固な団結が必要とされる。

（２０２２年６月２日脱稿）